

《論文》

新幼稚園教育要領領域「言葉」における  
「ねらい」の変更点についての考察

～言葉に対する感覚の豊かさを育むためのイメージモデルの提示～

福島 豪

# 新幼稚園教育要領領域「言葉」における 「ねらい」の変更点についての考察

～言葉に対する感覚の豊かさを育むためのイメージモデルの提示～

福島 豪

和文抄録：本研究の目的は、新幼稚園教育要領領域「言葉」のねらいに追加された、「言葉に対する感覚の豊かさ」とはそもそも何であるか、豊かにする目的は何かを考察した上で、改訂後の領域「言葉」の全体的なイメージモデルを提示することである。考察にあたっては、絵本や物語、言葉遊び、日常会話、日常会話に出現する擬音語等あらゆる言葉に関する活動を取り上げ、さらに幼稚園教育要領全体の改訂の目的、改訂の主軸とも言える「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえつつ、「豊かさ」とは何を指すのかを考察した。

結果的に、領域「言葉」の目的は、自分の気持ちを伝え、共感することであり、それらを可能にするために必要になる想像力、語彙力が「豊かさ」であると結論づけた。最終的には本稿の考察の結果となる領域「言葉」のイメージモデルを提示した。

キーワード：幼稚園教育要領、領域「言葉」、言葉に対する感覚の豊かさ、幼小連携、表現、擬音語、イメージモデル

## 1. はじめに

新幼稚園教育要領が平成29年に告示され、平成30年に施行された。この改訂にしたがい、総則、そして5領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」それぞれのねらい、内容、内容の取扱いがそれぞれ変更されている。この改訂は、中央教育審議会答申を踏まえ、①幼稚園教育において育みたい資質・能力の明確化、②小学校教育との円滑な接続、③現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直しの三つの基本方針に基づき行われたものである。

本論文では、5領域のとりわけ領域「言葉」における「ねらい」の変更点について考察をしたい。改訂前の領域「言葉」のねらいの一つであった「日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。」は、「日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。」<sup>1</sup>、つまり、「言葉に対する感覚を豊かにし」という文言が追加され変更されたわけであるが、具体的にはどのようにすれば言葉に対する感覚を豊かにすることができるのか、こういった点に留意すべきなのかに疑問が残る。幼稚園教育要領の改訂の基本方針の一つに、「言語能力の確実な育成」<sup>2</sup>があげられている点からしても、領域「言葉」に期待される部分は非常に大きなものであると思われるが、改訂後の領域「言葉」に求められる「豊かさ」とはそもそも何であるかを考察していきたいと思う。

考察するにあたって、まずは新旧の領域「言葉」を比較し、主な変更点を概観していくこととする。次に、

改訂前から継続的に活動内容の一つとして求められている絵本や物語についての考察をし、絵本や物語に期待される言葉の育みを確認する。次に日常の中の会話に見られる擬音語を観点とし、こどもの独自性のある、自由な表現について考察する。その上で、教師が領域「言葉」に関して留意すべき点は何かを考察するために、新幼稚園教育要領の柱ともいえる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を取り上げたい。そして最終的には、領域「言葉」の期待されている「言葉に対する感覚の豊かさ」とは何かを考察し、全体的なイメージモデルを提示していきたいと思う。

## 2. 領域「言葉」の改訂後の主な変更点

表1 領域「言葉」の新旧対照表

	新	旧
ねらい	自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。	
	人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝えあう喜びを味わう。	
	日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、 <u>言葉に対する感覚を豊かにし</u> 、先生や友達と心を通わせる。	日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。
内容	先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。	
	したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。	
	したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。	
	人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。	
	生活の中で必要な言葉が分かり、使う。	
	親しみを持って日常の <u>挨拶</u> をする。	親しみをもって日常の <u>あいさつ</u> をする。
	生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。	
	いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。	
	絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。	
	日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。	
内容の 取扱い	言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児とかかわることにより <u>心を動かされる</u> ような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。	言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児とかかわることにより <u>心を動かす</u> ような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。
	幼児が自分の思いを言葉で伝えるとき、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。	
	絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。	
	幼児が生活の中で、言葉も響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。この際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。	(新設)
	幼児が日常生活の中で、文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること。	

上記表1は領域「言葉」の新旧対照表である<sup>3)</sup>。本論の軸となるねらいの部分では、既述の通り「言葉に対する感覚を豊かに」という記述が追加されている。また、内容の取扱いの中で、新たに「幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。この際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。」とい



う記述が追加されている。この追加された記述の中で、特に「言葉の響きやリズム」「新しい言葉や表現」「言葉遊び」は新出の単語であり、結びに「言葉が豊かになるようにすること」とされている点からして、ねらいで追加された「言葉に対する感覚を豊かに」という文言に直接的に関係する取扱い事項であると言える。つまり、言葉に対する感覚を豊かにするためには、言葉の響き、リズム、新しい言葉、表現、言葉遊びを軸とした環境づくりが必要であることがうかがえる。

### 3. 「絵本や物語など」の機能の新たな強調点

改訂前の幼稚園教育要領領域「言葉」の内容の項目を見てみると、既に絵本や物語などに親しむことは記されており、この記述に関しては新幼稚園教育要領領域「言葉」においても変更なく記述されているところである。

まず、改訂前の領域「言葉」を見ていく。その中で「絵本や物語など」と記述されている箇所は、1) ねらい：日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。2) 内容：絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。3) 内容の取り扱い：絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。以上の三点である。1) は、「心を通わせる」とあるように、言葉のコミュニケーション手段としての機能の充実を図る目的とされていることがうかがえる。2)、3) は想像力を養うためのものとして絵本や物語が扱われているのがわかる。改訂後の領域「言葉」と比較的に見てみると、二つのことが言える。第一に、とりわけ上記3)においては、改訂後の領域「言葉」のねらいで追加された文言である「言葉に対する感覚」が養われるようにと記述されていることから、改訂後領域「言葉」のねらいの変更には、絵本や物語が直接的に関わっているということが見て取れる。第二に、改訂後領域「言葉」には絵本、物語に関する記述の項目が新たに追加されている。それは前節で述べた「幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。この際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。」という内容の取扱いの項目である。このことを踏まえると、改訂後領域「言葉」では、絵本や物語の中に出てくる多くの独特な言葉の響きや、リズム、新しい言葉や表現にも注目するという姿勢がうかがえる。現に絵本を概観する限り、絵本に出てくる言葉は、単にストーリーを進行させるためにあるのではないケースが多くみられる。例えば、『ノントンおねしょでしょん』は、「ノントン、ノントン、おねしょでしょん」や、「おねしょでしょん なかよくしょん」「みんなでしょん おふとんしょん」「しょんしょん おふとん かわかせ しょん」と、言葉遊びともとれるリズムカルな言葉が続き、その言葉の響きはこども達にとって物語自体とはまた別の面白さを伝えている<sup>4</sup>。

以上のことから、改訂後領域「言葉」には、これまでは強調されてこなかった絵本や物語の中の独特な言葉の響きや、リズム、新しい言葉や表現にも注目され、言わば絵本や物語の機能の新たな強調—すなわち、想像力やコミュニケーション能力の育みだけではなく、言葉の楽しさに触れること—がなされたと言えるだろう。幼稚園教育要領解説では、教師や友達が言葉を楽しそうに使用している場面に出会い、自分でも同じような言い方をし、口ずさむことでその楽しさを共有することもあると記述されている<sup>5</sup>。つまり、言葉の楽しさもまた、コミュニケーションへとつながることを示唆している。以上のことをまとめると、幼稚園教育要領の改訂後に期待される絵本、物語の機能は、①コミュニケーション手段としての機能、②想像力を養う機能、③言葉の楽しさを伝える機能と言える。

### 4. 言葉遊びから言葉に対する感覚の豊かさを育む

前節では、絵本や物語に着目し、絵本や物語の機能を拡大させることで、言葉に対する感覚の豊かさを育む

意図が改めて含まれているということを考察してきた。しかし改訂後の領域「言葉」の記述には、新たに「言葉遊び」という単語が追加されている。むろん既述した通り言葉遊びの要素は絵本や物語の中にも多く含まれてはいるのだが、絵本や物語だけに言葉の豊かさの育みを求めるのではない。実際、幼稚園教育要領解説では、この言葉遊びについて、手遊び、童謡、しりとり、同じ音から始まる言葉を集める遊び、お話づくりがあげられている<sup>6</sup>。もちろんこれらは改訂以前からも現場では展開されていたことではあるが、絵本や物語に限らず、そのような遊びもまた、言葉の発達や感覚を養う上では大切なことであることが改めて強調されているととれる。つまりこれは、改訂にあたって言葉に対する感覚を豊かにするための改めての手段の追加と捉えることができる。

## 5. 特定の活動以外における言葉

幼稚園教育要領の改訂前、改訂後いずれの領域「言葉」の内容でも「生活の中で必要な言葉が分かり、使う。」「生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く」と記述されている通り、こども達が言葉に対する感覚が豊かになる場は、絵本や物語、そして言葉遊びといった、言葉に直接的に関わる特定の活動をしているときに限ったものではない。普段の生活にもそうした場面は数多く存在するのである。例えば製作活動をする時、教師がこども達に出す指示の、「糊をペタペタ貼りましょう」「布をギュギュっとしぼってね」等がまさにその例となる。これらの指示を「単なる伝達」に限定した場合、「ペタペタ」「ギュギュっと」といった擬音語を使用する必要はない。また、お遊戯会などの行事の練習時には、整列の指示の時に「気を付けピッ！」とリズムカルな発話がみられるが、これも指示のみに限定した場合は、リズムを取る必要もなく、したがって、「ピッ！」という言葉も不要なのである。教師はこうした日々の日常の活動の中でも、こども達への言葉がけの際は言葉の響きやリズムを常に意識している。こうした点を踏まえると、領域「言葉」のねらい、内容、内容の取り扱いとは特別に活動項目を取り上げて意識すべきものではなく、日常すべてにおいて通底すべきものであるということがわかる。

## 6. 改訂後領域「言葉」において留意すべき点（擬音語を観点として）

しかし、ここで留意すべき点がある。それは、根本的な問いであるが、「豊かさとは何か」という点である。こどもの感じ方はそれぞれであり、かつ自由である。前節で取り上げた擬音語を観点として見ていきたい。幼稚園教育要領解説の中で、擬音語について書かれている箇所がいくつかある。

「ゴロゴロ ゴロゴロ」というように言葉の音を繰り返すリズムの楽しさや「ウントコショ ドッコイショ」というような言葉の音の響きの楽しさなどもある。また「サラサラ サラサラ」というような言葉の音の響きの美しさもある<sup>7</sup>。

雨が降っている様子を表すときに「雨が降っている」と言うだけではなく、「雨がしとしと降っている」「今日は土砂降りだね」と雨の降り方を表す言葉を一言付け加えると、その様子をより細やかに表現することができる。そのような表現に出会うと、幼児は「雨が降る」にも、いろいろな言葉があることを感じる事ができる<sup>8</sup>。

上記引用した部分のなかで擬音語となるものを抽出してみると、「ゴロゴロ」「サラサラ」「しとしと」があげられる。擬音語は使用する際に細かい制約は存在しない。しかし擬音語は一般語彙よりも生き生きとした臨場感に溢れ、繊細かつ微妙な描写を可能にすることから、日本語には不可欠な言語要素である<sup>9</sup>。つまり、擬音語はより細やかに表現することを可能にするための不可欠な表現手段といえるのだが、別段制約があるわけでは

ない以上、リズム、響きの面白さから、こどもの感じたままの独特な表現が生まれる可能性は十分に考えられる。例えば雨の降る音を擬音語で表現するとしたら、幼稚園教育要領解説では「雨がしとしと降っている」と記述されているし、他の表現としては「ザーザー降る」「ポツポツ降る」「パラパラ降る」等がある。これらは実際にそう聞こえているかは不明なところであって、我々は語彙の中から普段マジョリティの中で使用されている擬音語の相場の中から選択し、それを使用しているに過ぎない。

他の言葉遊びを考えてみると、例えばしりとりは、予めルールが設定されているため、間違いが生じた際はそれが互いに「間違いである」と明確に確認、共有することが可能である。絵本に関してもこれは同様のことであり、文字を覚え始めたこどもが、絵本の中の文字を読み間違いした場合、それは正しい言葉を教えることが可能である。しかし擬音語に関して言えば、普段の会話の中から出現してくるものであるため、こどもの感覚次第では、一般的ではない表現も出てくる可能性がある。そしてそれは、制約が極めて少ない表現方法<sup>10</sup>であるがゆえに、独特な表現が生み出されたとしても、それは「間違いである」とは言い難いのではないだろうか。しかし、それではそうした独自の表現を、制約がないからといって「豊かさ」と捉えるべきことなのだろうか。これは擬音語を除いた日常会話においても、特段の制約が存在しない点において同じことが言える。

擬音語を観点として、こどもの言葉に対する感覚を豊かにする育みの中で、「豊かさ」の解釈について考察すると、こどもの語彙数を増やし、そしてその都度の場面にあった言葉を的確に使用させることが豊かにすることなのか、それとも、こどもの自由な発想を基礎として、ありのままの言葉を表出させることが豊かにすることなのか、という疑問が残る。

## 7. 「10の姿」から「豊かさ」の意味の考察

こうした疑問について考察するにあたっては、幼稚園教育要領の改訂の基本的な意図を確認する必要がある。2018年の幼稚園教育要領の改訂には、幼小連携の円滑さがかなり強く意識されている。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、所謂「10の姿」はまさに幼小連携を強く意識したものとなっている。そこで、まずは「10の姿」についてみてみることにする。

表2 幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」

健康な心と体
自立心
協同性
道徳性・規範意識の芽生え
社会生活との関わり
思考力の芽生え
自然との関わり
数量・図形、文字等への関心・感覚
言葉による伝え合い
豊かな感性と表現

上記表2は幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」<sup>11</sup>の各項目である。これらは全て活動において分断的に扱われるものではないが、とりわけ領域「言葉」に直接的に関わるものとしてあげられるのは、「数量・図形、文字等への関心・感覚」「言葉による伝え合い」の二つの項目である。「数量・図形、文字等への関心・感



覚」について、幼児教育部会審議の取りまとめでは「遊びや生活の中で、数量などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりして、必要感からこれらを活用することを通して、数量・図形、文字等への関心・感覚が一層高まるようになる。」と述べられている。また、「言葉による伝え合い」については「言葉を通して先生や友達と心を通わせ、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付けるとともに、思い巡らしたことなどを言葉で表現することを通して、言葉による表現を楽しむようになる。」と述べられている<sup>12</sup>。

これら二つの項目のうち、とりわけ「言葉による伝え合い」においては、改訂後の領域「言葉」の内容にも見られた通り、先生や友達とのコミュニケーションを想定していることから、やはり第一の目的としておかれている「言葉の豊かさ」の第一の意味は、伝え合って心を通わせることにあると考えられる。さらに他の項目を鑑みた場合においても、「協同性」「社会生活との関わり」等は他者との関わり的重要性に関わる項目であることから、他者との関わりの中で必ず出現する「言葉」の期待される機能は、的確に伝えることであるといえる。また、「豊かな感性と表現」の項目についても、以下のことが述べられている。

みずみずしい感性を基に、生活の中で心動かす出来事に触れ、感じたことや思い巡らしたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりして、表現する喜びを味わい、意欲が高まるようになる<sup>13</sup>。

ここでも、「友達同士で表現する過程を楽しむ」という記述がある。言葉のみならず、表現全体としていえることは、「伝えること」「伝わること」を重要視していることである。自分の思いを共有すること、そのために伝えること、「豊かさ」はそれらができるようになるためのものであるということが出来る。それは幼稚園教育要領の改訂の基本方針である「社会との連携及び協働」<sup>14</sup>という点につながっていくものである。つまり、「豊かさ」の意味合いは、自由、独特な表現を生み出すということよりは、各々の場面でそれに応じた適切な言葉を使用することができるようになることであると解釈することができるだろう。

## 8. 自由な表現の取扱いについて

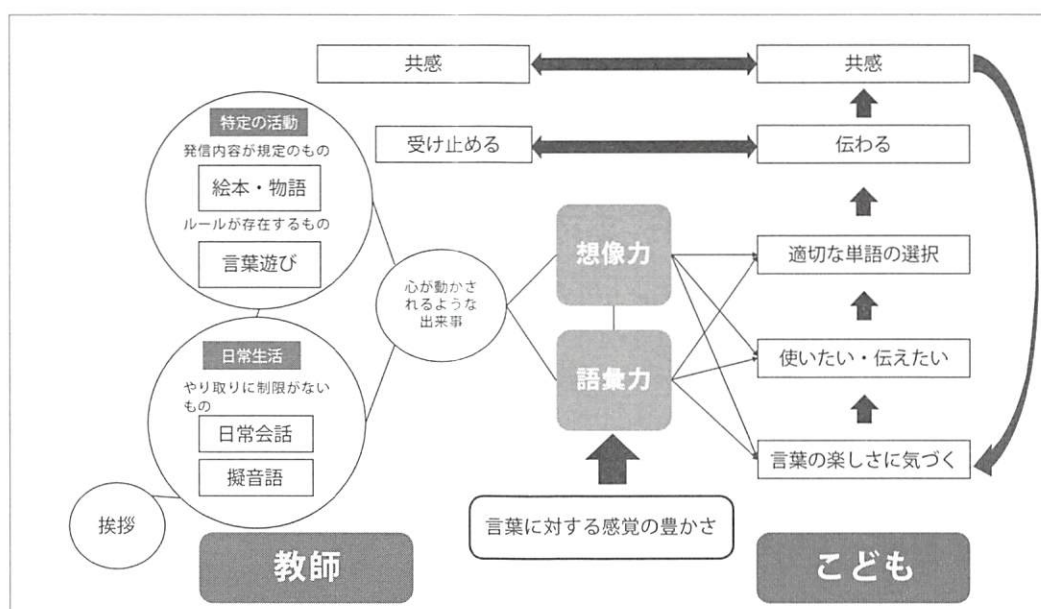
しかし、それでは自由な表現、独自性のある表現は期待の外にあるのかと言えば、そういうわけではないだろう。例えば、幼児教育の現場内で、こどもが教師に向かって「先生、折り紙」と伝えたとする。それはこどもにとっては当然自分の伝えたい言葉であり、選択して発した言葉である。そこで教師が、「折り紙がなに?」「折り紙ってなの? 折り紙できたよなの? 折り紙どうぞなの?」と言った具合に応じる。もちろんそのこどもは明確な意図をもって教師に声をかけているわけだが、教師は(状況的にそれがどういう意図なのかをわかっていなくても)詳しくどうしたいのかの言葉を引き出そうとする。ここでそのこどもは自分の意志が相手に伝わりきってないことを自覚し、さらに言葉を付け足すのである。これは、教師によるこどもの自由な表現のサポートであり、当然阻害ではない。7節でみてきた「10の姿」を踏まえると、これはまさに「言葉による伝え合い」の姿であり、コミュニケーションの円滑さを促す姿勢だと言える。こうした場面で、こどもに求める豊かさとは「伝わるための言葉の習得」である。自由な意思を相手に伝えるためにはそれを完了させるための語彙がそもそも必要であり、数ある語彙の中からこどもは選択をして伝えることができる。これは6節であげた擬音語についても同様のことが言える。こども達に擬音語で表現するという手段自体をまず教え、その際に雨で言えば「しとしと」「ザーザー」「ポツポツ」「バラバラ」といったように降る度合いや聞こえ方によって表現が多彩にあることも教える。そのうえでこどもは状況に応じて表現を選択し、伝えるのである。それは、自由な表現の阻害ではなく、むしろ自由な表現を可能にするためのものである。ただし、擬音語の表現においては、先にも述べたように、語彙の学びを基礎として独特な表現が出現することも十分にありえる。既定の表現方法ではない新たな表現の出現は、場合によっては擬音語に限らず、日常会話で見受けられるかもしれない。

話し方、言い回しにおいては、それぞれの個性に基づくものであり、それが「伝わるか」「他者と共感可能か」を軸に考えた際に、それらの条件が揃う場合に限りそれは「豊かさ」のうちに入るといってもよい。こどもは話す内容だけでなく、そうした独自性のある話し方や言い回しにも興味を持ち、まねをしたり、新しい言葉を覚えたりしながら、自分の思いや考えを伝えられるようになっていくのである<sup>15</sup>。このように、制約の少ない、或いは存在しない範囲における表現のなかには基礎的な知識をベースとして新たな表現が生まれる可能性も十分にあり、それは受け止めるべき個性であると言える。

## 9. 改訂後領域「言葉」のイメージモデルの提示

これまでの論を踏まえて、以下のように改訂後の領域「言葉」のイメージモデルを提示したい。

表3 新領域「言葉」イメージモデル（考察）



領域「言葉」のねらい、内容、内容の取扱いに従いつつ、これまでの論を整理する意味で、モデル化を試みた。教師は挨拶や日常会話から始まり、そして絵本・物語、言葉遊び等言葉に関連する特定の活動を実施する。そしてこうした活動のみならず、日常生活の中でも、当然言葉は使用され、その中には先述したような限定的に取り扱うべきではない擬音語等も含まれることとなる。それらすべての中で、こどもは言葉の楽しさに気づき、それらを使いたいと感じる。また、こども達はいろんな場面で心が動かされるような出来事に出会い、それらを伝えたいと思う。そうした心の動きに基づき、こどもは他者に伝えるために適切な単語を選択し、伝えようとする。伝わった際の共感できた喜びをもって、再度それが言葉の楽しさの気づきへとつながっていく。この繰り返しのよってこどもは想像力や語彙力が少しずつ育まれていき、より他者に伝える精度が高くなり、共感へとつなげやすくなっていく。すなわち、「言葉に対する感覚の豊かさ」の最終目標は他者へ伝えること、他者と共感すること、或いはそれらをもって改めて言葉の楽しさに気づき、また伝えたいと思い、また伝える、また共感する、という循環を生み出すことだと言える。したがって、「言葉に対する感覚の豊かさ」の「豊かさ」とは、その目標をより円滑にかなえることができるための想像力や語彙力を指すのだと言えるだろう。

## 10. おわりに

本稿は、幼稚園教育要領改訂に伴い、領域「言葉」の変更された部分のうち、主にねらいの「言葉に対する



感覚の豊かさ」について考察をしてきた。言葉は絵本や物語、言葉遊び等、直接的に言葉に関わる活動のみならず、当然日常生活の中の数多くの場面においてもみられる—そこには制約のない擬音語も多々出現する—ことから、その性質上、「豊かさ」の解釈について、それが言葉の正しさを指すのか、自由な表現を指すのか、という疑問が出てきた。そこで、「豊かさ」をどう解釈すべきかについて、幼稚園教育要領改訂に伴い追加された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」いわゆる「10の姿」を手掛かりとして考察を重ねた。幼稚園教育要領全般—とりわけ幼小連携について—そして「10の姿」の項目を概観する限り、改訂で求められる「豊かさ」とは伝え合いや共感を可能にするための豊富な語彙力、想像力ではないかという結論に至った。そこで、最後に論の考察をイメージモデル化し、提示した。

ところで、幼小連携といえば、とりわけ領域「言葉」は小学校教科の国語につなげるためのものとして捉えられるケースが多いが、領域は決して教科に向けた準備教育のためということではない。あくまでも自己を表現する力を身につけるための教育が領域なのである。幼児教育は小学校の準備教育ではないが、しかし幼児期のうちに言葉の楽しさに気づくことは、こどもにとって、小学校以降、ないしは人生全体を通して非常に重要なことである。本稿の考察については、まだ解釈が不足している部分も多くあるかもしれない。しかし、確実に言えることは、こども達がこれからの時代を生き抜くために、情報や自身の想いを共有していくことは必須のことであり、幼稚園教育要領の改訂の最大の意図は、こども達の未来の幸せを願っているものであるということ間違いなさだろう。昨今、新型コロナウイルスの感染拡大により、こども達が出会う大人はほぼ全員がマスクを着用している時代へと一変した。大人たちの口の動き、表情が一切見えないという劇的な環境の変化はこども達の育成、特に「言葉」面の育成においては多大な影響を与えるということは言うまでもないだろう。今、この緊迫した時代を生きるため、我々こそが「言葉に対する感覚の豊かさ」を持ち、こども達にマスクを通してでも様々なことを伝えられるように努力しなければならないのかもしれない。

#### 【注】

- 1 文部科学省『幼稚園教育要領』フレーベル館、p.16、2018年、下線は筆者が追記。
- 2 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、p.5、2018年。
- 3 文部科学省 2008年改訂の幼稚園教育要領と2018年改訂の幼稚園教育要領をもとに筆者が新旧対照表を作成。変更点に下線を追記。
- 4 キヨノサチコ『ノンタンあそぼうよ⑥ ノンタン おねしょでしょん』偕成社、2007年。
- 5 文部科学省 前掲書、p.211これについては当然絵本や物語に限らず、生活の中での場面も含意している。
- 6 文部科学省 前掲書、p.219、p.220。
- 7 文部科学省 前掲書、p.211。
- 8 文部科学省 前掲書、p.219。
- 9 田守育啓著『オノマトベ 擬音・擬態語をたのしむ』岩波書店、p.v、2002年。
- 10 擬音語には、ゴロゴロ、ツルツルのような「ABAB型」や、にっこり、どっさりのような「AっBり型」、ころり、ぶらりのような「ABり型」といった型のパターンはあるが、それ以上のルールはなく、時代とともに変遷してきたものである。（参考：山口仲美著『犬は「びよ」と鳴いていた 日本語は擬音語・擬態語が面白い』光文社、2002年。）
- 11 文部科学省 幼稚園教育要領、2018年から、筆者が表作成。
- 12 文部科学省「幼児教育部会における審議の取りまとめ」、p.5、2018年。
- 13 同上書、p.5
- 14 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、p.4、2018年。
- 15 無藤隆監修『幼稚園教育要領ハンドブック2017年告示版』、p.52、2017年。

#### 【参考文献】

- 汐見稔幸・無藤隆監修『平成30年施行 保育所保育指針 幼稚園教育要領 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 解説とポイント』ミネルヴァ書房、2018年。
- 無藤隆編著『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』東洋館出版社、2018年。
- 小野正弘著『オノマトベ 擬音語・擬態語の世界』角川文庫、2019年。
- 小野正弘著『オノマトベがあるから日本語は楽しい 擬音語・擬態語の豊かな世界』平凡社、2009年。

# A study of purpose of “Language” in Revision of the Kindergarten Study Courses –Suggesting New “Language” model to acquire many expressions of sense in words–

Go FUKUSHIMA

The purpose of the study is to clarify what many expressions of sense in words are, and what purpose to make children's language many expressions is, in “Language” in Revision of the Kindergarten Study Courses, and suggesting New “Language” model to acquire many expressions of sense in words. For this study, I pick picture book, story, play on words, daily conversation, onomatopoeia up, and overview the aim of Kindergarten Study Courses, especially “a figure wanting to bring up by the infant end”.

Finally, I conclude the purpose to make children's language many expressions is to tell impressions each other, and so many expressions is ability of imagining, vocabulary. According to my study. As summary, I suggest New “Language” model to acquire many expressions of sense in words.

**Key Words:** Kindergarten Study Courses, Language, Many expressions of sense in words, collaboration between early childhood education and school education, onomatopoeia